

子どもたちの行為や表情等を読みとることは、非常に大切なことです。本書では、とくに「空想遊び」を中心に、その発達の意味づけについて論じてみます。

第三は、前記第一、第二の視点を補足するために、大学生たちが自分の子ども時代のごっこ遊び（空想遊び）を回想したエピソード記憶の記録を、随時織り込んでゆきたいと思えます。絵本が絵と文で「語る」という手法において、子ども時代に特徴的な発達現象を意味づけ解釈するものならば、それを読む読み手に、自己の過去を振り返り自らの発達を分析・解釈する上で、——つまり「自分のなかに発達を読む」行為に——、どのような影響を与えるものでしょうか。読み手は、描かれているエピソードが自己の経験と重なるとき、そこで示唆されている意味づけや解釈を自分自身のそれと比較したり、ときにはそれまで自分では気づかなかった新しい解釈を発見し、自分というものの概念の組み直しや発達観の再構築をすることも可能だと思われまます。

わたしは、1994年から学生たちに子ども時代のごっこ遊びの回想記録を書いてもらい、収集してきました。そして、1997年からは少し実験的な色彩を加え、外からは観察することができない、子どもの空想遊びの心的表象世界を巧みに描いた数冊の絵本を学生たちに見せ解説した後、彼女（彼）らのごっこ遊びを回想してもらい、その記録を収集しています。現在、わたしが所属する大学と非常勤の大学で収集した記録が約600ケースほど手元にありますが、わたしの予想をはるかに上回る多彩な内容のものがあります。

かなりの学生たちが、「こんな機会でもなければ絶対思い出すことはなかった」とか、「すっかり忘れていたが、自分はとても幸せな子ども時代をもっていたんだ」などの感想を述べています。これら60

0ケースのなかには、記録としては平凡かつ断片的なものや、学生によっては、なにも思い出さないと
いう場合もあり、それはそれでひとつの研究課題となります。

わたしは、学生たちの回想記録を読むまでは、絵本のなかのいくつかの印象的な主題（エピソード）は、芸術家である作家・画家の特別な才能によるものであり、それほど普遍的には存在しないのではな
いかと考えていました。しかし、学生の回想記録を丹念に読み進めるうちに、語りの構図や技法の質
は当然のことながら大きく異なるものの、具体的なエピソード内容については絵本とまったく同じもの
が数多く存在していることを発見しました。このことは、わたしの予想を大きく外れるものでした。

学生たちの回想記録を、この研究のなかに織り込むことの目的は、絵本作家・画家の取り上げる物語
の主題が特別なものではなく、ごく普通の学生たちの子ども時代にも共通するものであることを示した
いからに他なりません。

以上、三つの検討課題の具体的な方法などは、それぞれの問題を取り上げる各章のところで詳しく述
べますが、次章ではこれらすべての研究の基盤を支える「子どもの心を理解するための絵本データベ
ース」について触れておきます。